

# 夢記録

ゆうすけ

舞台は学校で主観はネクラなロンゲの少年で、その唯一の友達であるスキンヘッドの少年が数人の学生にリンチされています。

ロンゲ少年はその場に居合わせているのに、空気のような存在で誰も気にとめようともせず、ハゲを見守るばかりで助ける事もしません。

されそうになると、長髪の少年＝自分はそれから先を見るのが怖くなって逃げ出してしまい、屋上の入り口で頭を抱えて震えています。

、巨大電動ノコギリもそこになく、長髪の少年は全てが夢であったと思いこみます。自分に親しくしてくれた、スキンヘッドの少年の存在も初めから夢だったと。そして、10年以上の時間が過ぎ、長髪の少年はその学校の教職員となっていました。社会的な立場も出来、少しは充実した時を過ごしています。

ます。全ては夢だと思っていたのに、突然現れた現実言葉無く立ちつくすばかり。

うと、復讐計画を持ちかけます。それは催眠術で学生達の意思を奪って、互いに殺し合いさせるというもの。社会的な立場を手に入れ、多少なりとも学生達への思いやりもあって、抵抗があるもののスキンヘッドの男を見殺しにしてしまった過去がある以上、もう逃げる事は出来ず従う事に。

そんな、復讐計画を一人の女子生徒がたまたま聞いてしまい、その時から主観が彼女に代わります。

だが、彼女は物音を立ててしまい、呆気なく捕まり監禁されてしまいます。

になっていて、彼らが計画を進める間、彼女は手足を縛られ、モンスターに見張られています。

彼女は逃げ出そうと色々画策するものの、全てが結構あたまの良いモンスターに憚れてしまいます。

に気が付きます。

そこにいたのは、両目を覆いガクガクと震える小柄な男子生徒でした。

どうやら、始めからここに隠れていたようでした。

あまりの男子生徒の情けなさに啞然となる女子生徒ですが、自らを囮にして男子生徒を逃がし、助けを呼んでもらうという計画を立てます。

そして、今度は小柄な男子生徒に主観がうつります。

女子生徒に逃がしてもらい、科学室を脱出した男子生徒ですが、廊下で待ち受けていたものは、催眠術により意思を奪われてゾンビのようになった生徒や先生達。

襲いかかる亡者に服を破かれ、傷を負わされながらも、彼はひたすら学校から逃げる為に走り続けます。自分を助けてくれた女子生徒を助け、学校の仲間達を助ける為に。

ったりした気がしますが、なんとか逃げ切る寸前で長髪の男に捕まってしまう、夢から覚めてしまいました。

夢を見ている間だけ夢体(?)として、現実の世界の世界をさ迷っているような設定で、普通の人々が往来している普通の駅とかに、夢体の間しか見れない、入れないようなゾーンがある。

主に時間が止まった廃墟のような空間だ。

夢体になっている間、自分が夢を見ていると認識する事により、超常的な力を使えたりする。

だが、寝ている間、体に蓄積されているダメージ(?)が夢体にも反映され、おしっこがたまったり、喉が渴いたり、鼻がつまったり、体がしびれたりする。

ある目的を持って夢体となっていて、その目的を果たすまで夢から覚めることは無い。

夢体の間に手に入れた物は持ち帰ることが出来ないが、経験値は現実には反映されると言う。

俺はよく、卒業式の夢を見る。学校の卒業式に、今の生活を送り、今の価値観を持つ俺が参加するというもの。自転車やら電車で通学するのがめんどくさいし、遅刻しそうなので学校にバイクや車で行ったりすると言った内容が多い。

今回見た夢も何時もの夢と同じように、今の生活と価値観を持った俺が学校に行くのだけど、何時もと違うのは舞台が卒業式では無く、卒業式を間近に控えた日だと言う事。

放課後、みんなで掃除しているとチーマーのリーダーTぐちが、俺が好きだった女の子に対して声をかける。

「知っているか、多分、ゆうすけってお前のことが好きだぜ」

それを聞いていたガキ大将のKいちがしゃしゃり出る。

「やめろよ、本人のいない所でそういう事言うの! それに解からないだろ、本当にゆうすけがその子の事が好きかどうかなんて!」

「いや、絶対に好きだって!!」

みるみる二人は喧嘩になり、メンドクサイけど俺が仲裁に入る。俺は二人の肩を抱き俺の事で喧嘩するのはアホらしいだろと言う。

「いや、だって、ほっといたらお前絶対に告白しないだろ!」

そう言うTぐちの言葉が胸に刺さる。確かに俺は絶対に告白なんかしない。告白する勇気を持たない屁たれ故、そのまま卒業式を迎え、やり切れない思いを悶々と抱え続けるだけだ。俺はこのまま終わってはいけないって気持ちになり、その日の放課後に告白する事を決意する。わかった、わかったから、ここは引いてくれないかとその場を収め、掃除が終わって教室に向かおうとする。

だが、自分が向かうべき教室の場所が解からない。今いる学校は知らない場所で、知らない生徒が大量にいる。路頭に迷った所で夢の中で携帯が鳴る。nextって言う実在しない客先からの着信を取ると夢から覚めた。

過ぎ去った時代を舞台にした夢の中では脱・屁たれ実行しようがないし、実行しても意味ないと言う事だ。ただ、あの頃と違って、屁たれから脱したいって気持ちはあるかも。

夢の中で夢を見続ける夢を見た。

なんとか起きて、夢について回想していたら、それすらも夢だった。

夢の中の夢として覚えているのは三つだ。基本的にどの夢も寒くて大雨洪水状態である。

一つ目は大雨が降り注ぎ、洪水状態の田舎の町。

そんな中で小学生が集団で地元高校の甲子園の応援に行こうと、駅だか港に向けて歩いている。

その集団に加わっていない何人かの小学生が、屋根の上に登っていてその集団に向けて石を投げている。

ダメージを与えようとは思っていないらしく、ランドセルに当てたり、視界に入る所に投げつけたりしているけど、小学生の集団はそれを意に介せず歩き続けて、やがて視界から消えてしまう。

二つ目はテレビを見ていたら、友達が車で増水した川に入り、見事渡りきる映像が流れていたと言う夢。

あいつ何やってるんだ!! あぶねえと思いながらも、マジすげえなと思ってしまう。

三つ目は大雨・洪水によって外部から隔離された高校。

そんな中で暴力教師が女子生徒を人質にして立てこもるという事件発生。

それを救ったのは、航空用のレシプロエンジンと、ジェットエンジンによる究極のハイブリットエンジンを搭載したメカ番長だった。

...足があるジオングに学ランとリーゼントが合体し、背中の羽にプロペラとジェットが搭載されたみたいなデザインね。

体当たりで壁を破壊すると、アフターファイアで学校ごと悪徳教師を焼き払い事件解決するが、ほかの先生にやり過ぎだと怒られるという。

今日見た夢は大場つぐみこと、ガモウひろし先生の家招かれ、食卓を囲みながらあれこれ話を聞くというものだった。ガモウ邸はドイツ風のメルヘンチックな家で、二階に上がるとひげ面のダンディな先生と、時代錯誤な貴族みたいな格好をした家族が出迎えてくれて、リビングで木製の長テーブルを囲って手巻き寿司を食べながら色々話を伺った。

先生はどんな気持ちで漫画を書いていますか？

私の漫画はよく世の中に訴えかける作品と言われますが、そんな大それたものではなく、単にエンターテインメントとして、自分が面白いと思ったものを書いているだけです。漫画には何をしなければいけない、何をしてはいけないという事もなく、意味さえなくても、結果的に面白く、人々に受け入れられるものであれば良いと思っています。

どうすれば面白い作品を作れますか？

まず、自分には面白いものが作れると、自惚れる事から始めてください。そして、自分自身が腹を痛めて生み出した作品が面白いと信じて、それをアピール出来るように必死に努力する事です。自分を信じて努力をする事が出来る人には、自ずと結果が着いて来ると思います。

先生の作品はしっかりとしたヒキがあり、毎週次回が気になる楽しさがありますが、ヒキを作るコツはありますか？

物語というのは基本的に「起承転結」でなりたっています。一話の中で起承転結を完全に完結させるのではなく、第一話が「起承転」だとするならば、第二話で「結起承」、第三話で「転結起」、四話で「承転結」と、「起承転結」を複数の話で途中で区切り、複数の話で作られる小さな「起承転結」を繰り返して、更に大きな「起承



「転結」を作り上げて行くようにイメージすると、私の場合は自然とヒキが作れます。

先が読めない展開はどうやれば考えられますか？

先を考えない事です(笑) もちろん、大まかなラストは考えていますが、それ以外は考えていません。唐突にキャラクターを登場させて、それぞれのキャラクターを勝手に行動させています。私の場合、キャラクターに始めから役目を与えて考えるのではなく、始めは無垢だったキャラクターを掘り下げて行く内に、意図しない性格が見えてきて一人歩きをし始めます。キャラクターが勝手に動いていて、作者ですら先が読めないのですから、読者はもっと読めないでしょう。ただ、後々まとめるのが大変ですが。

どうやったら物語をまとめられますか？

連載作品はとてもフレキシブルなもので、作者ですらも意図しない方向に流れてしまうものです。私の場合、始めにおおまかな結末を考えていますが、そこに向かうタイミングを見計らう事が重要だと思います。物語の前半から中盤にかけては、唐突にキャラクターを登場させては、自由に動かし掘り下げて行く作業をします。それが何時になるかは解りませんが、キャラクターを掘り下げ切ったと思った時が、物語をまとめるタイミングです。あとは予め想定していた結末に向けて、それぞれのキャラクターをチェスの要領で配置して動いてもらうだけです。効果的にキャラクターを配置さえ出来れば、自然とラストに向けてまとまります。そのタイミングを逃すと、矛盾や作品の質の悪化が目立ちます。

どうすれば、キャラクターをうまく配置できますか？

私の場合は作中の予定表を作り、その予定表に合わせてキャラクターに動いてもらっています。このキャラクターはクリスマスには何をしている？ 大晦日には、お正月、成人式にはと、実際の人間と同じように、キャラクターに予定を作っけてあげています。

最後に言いたいことは？

これは私の漫画の作り方であり、他の人が真似をして上手く行くとは限りません。あまり、参考にしないで下さい。人の道をそのままなぞって成功出来るほど、世の中甘くはありません。自分自身と対話を続け、自分自身の道を見つけ出し、歩き続ける事の出来る人だけが成功出来ると思います。

以上が夢の中のガモウ先生との対話だが、本などのメディアでのインタビューに合わせ、自分自身が先生の漫画を読んで感じた想像で構成されている。あくまで俺の想像なので、まったくもって信憑性はない話である。

学校で自分が全く意味のないと思ってる独善的な授業のテストを受けて、めんどくさいから無回答で提出したら、居残りさせられて最後までやらされたと言う。

家に帰ろうと思ったら、自警団気取りの二人の爺が駐車場をふさいで話し込んでいて、邪魔だと思っていたら、突然因縁を付けられ強制逮捕された。

何様のつもりだよと言うと、自分たちの理解の範疇を超えているって理由だという。

その攻撃性が我々の判断の正当性を証明している。大人しく郷に従って生きない限り解放する事は出来ない。

普段から挨拶を欠かさなかったり、気を使ったりしているのに、無視して最初から拒絶しているのはどっちだよって話。

他にもちょっとHな話だったり、宇宙エレベーターに乗る話とか、計四つぐらい夢を見た気がする。

一昨日も宇宙(SF)関係の夢みた。

学園祭規模の全国共同宇宙祭が開催され、参加者の中から抽選で選ばれたチームの中から、更に選考されたひとチームだけが、成層圏エレベーターで宇宙体験が出来る。

俺のチームは、俺ともう一人の友達と、芸人の鳥居みゆきの三人。

どういう訳だが第三選考まで残ったのだが、他の人は口伝いで第三選考の時間が知らされたが、俺と鳥居みゆきのみがそれを知らなかった。

遅刻ギリギリになり、友達から連絡が入りようやく時間を知らされ、急いで動き出す。

鳥居みゆきを迎えに控え室に行くと、何故かシャワーシーンに遭遇(汗

顔を赤くしながら、ひどいもの見せるんじゃない！ っていう俺・・・ラブコメかよ！  
！

って所で終わってしまう、そんな夢。

3時半ぐらいに一回目が覚めて以来、ほとんど眠れなかった。

そんな中、夢を見た。

朝、仕事の時間が迫っても、PCをうまく操作出来ず、仕事の資料が印刷出来ない。

仕方ないから手元にあった、古い青焼きの資料を持っていく。

場面はいきなり現場に変わり、朝一番で消防設備点検と共同で機械排煙設備の点検をする。見た事もない若い男性が点検を担当しているが、排煙機を運転しても音がくぐこもっている。

どっかでちゃんと排煙口開けてる？ って聞いても返事がない。手にしたボロい無線機で、火報盤にいる消防設備屋に聞いても返事がない。

気がつけば次の作業が始まっていて、居室内の非常照明の点検を開始する。最上階はオーナーさんの住居で、本来なら点検を対象外だが、オーナーさんの意向で点検することに。オーナーさんには子供が7人ぐらい居る。

「何やってるのー？」

って点検しているとまとわりついてくる。

数人の子供が点検の真似をしたのか、照明器具にぶら下がり、器具が脱落し吊ボルトが露出している。

「イタズラしちゃダメだよ」

と俺が言うと、オウム返しのように他の人が同じ言葉を言う。

「違うよー、おっこっちゃったから直してるだけだよー！」

「これは天井裏に潜らないと直らないよ。後で直しておくから気にしなくて良いよ」

と、俺が言ったつもりでほかの誰かが言っていた。

その後、下の階は事務所や、撮影スタジオ、医者等がテナントとして入っている。

「何処か指摘事項があったら、俺に言って下さいね」

と言うと作業を続けるが、指摘事項があっても誰も教えてくれない。

仕方ないのであちこち見回り、全体を把握しようとするが、メモしようとするが、後から後から記憶が抜けて行き、情報をまとめられない。

どうした事かと思うと、場面が飛んで墓場に。

そこに自分が眠っていると直感で理解する。

生きていると思っていたのは自分だけだったと気づく。

黒いマントを羽織った三人の子供が墓石に腰かけて声をかけてくる。

「君がいなくてもそれなりに世界は回って行く。

ここに止まっても君の居場所はないよ。一方で君を必要としている人 達もいる。

その人たちに再び出会うには、君が現実を受け入れ、生まれ変わるしか無い。

時間はかかるが、いつかきっと出会えるよ」

「俺は・・・」

って感じの夢だった。

オチが面白いね。

自分が生きていると思っているのは自分だけだという。

元ネタはシックスセンスだろうな(汗

## 2010.8.6 女の子に仕事を奪われる

---

何故か学校で図面の読み方を教えていて、何故か小中高専門と出会った色々な奴が班を組み、それぞれに渡された図面の中から、必要な情報を読み取るって課題に取り組んでいる。

俺はと言うと、実務経験もあるし、資格も持っているから、別に勉強なんてしなくて良いだろと、一人漫画を読んです。

しばらくして、同じ班の女の子がこれで良いかなと、意見を聞きにくる。課題の図面は印刷が潰れてて、ほとんど読めない中、巻頭にある機器一覧から関連ありそうな項目をリストアップし、読めない情報を想像で補正したらしい。

想像と言いつつも、殆どあっていたりする。

「ちゃんと勉強して、経験を積めばなんだって出来るよ。むしろ、今からでも、俺の代わりに働いた方が良いんじゃないかな」

と俺は苦笑した。

その女の子は小学校、中学校の同級生で、小5の時に好きな女の子とは別に、容姿・性格で消去法で選んだ恋人候補の内の一人だった。

↑ひどい考えかも知れないが、それが思春期の男子のsagaである。

その夢に出てきた女の子は文才があり、小5の時に行った富士山移動教室の感想文を、原稿用紙25枚以上書けと言う夏休みの宿題で、100枚以上書いてきて先生を驚かしていた。

俺はと言うと、最低限の25枚書いただけだった。いや、もともと文章を考えるのは得意だったし、思い出は沢山あったので、書こうと思えばもっと書けたのだが、思い出をさらけ出す事に躊躇してしまったんだ。



全員に共通する思い出など、取るに足らない事ばかり書いてしまった。出発の日、台風が重なり学校の校庭が水没したり、宿舎の部屋が崖崩れの影響で使えなくなり、他のクラスの班とタコ部屋になったりとか、道路閉鎖で帰れなくなりそうになったりとか。十分、面白い話だと言う説もあるが、生粋の嵐を呼ぶ男である俺にとっちゃ、それが当たり前の事だと思っていたし。

本当に大切な思い出……。友達と些細な事で殴り合いの喧嘩をしたり、夜寝ている友達の股間に水をかけたり、徹夜で誰かが持ってきたダイの大冒険を読んだり、部屋を抜け出して肝試ししたり、お土産にサングラスと木刀買ってみたいり、富士樹海ハイキングで勝手な行動をて遭難してみたり。楽しくも愚かしい思い出を先生に晒したくなかった。

仕方無かったとは言え、中途半端な物を書いてしまった事に後悔し、その子を悔しさの象徴として位置づけ、勝手にライバル視するようになった。

中三の時に合唱コンクールのキャッチコピーの募集で、俺とその子の作品が最終選考に残り、最終的に俺のが選ばれるって事があった。その子にとっちゃ取るに足らない小さな事だったのかも知れないが、俺にとっちゃ最高に嬉しい事だった。見事リベンジを果たしたつもりになっていたよ。

まったく努力も勉強もしなかったけど、俳句や、作文、国語のテストで高い評価を得ていた。漫画の影響もあって、努力をしないで、ご都合主義で才能が発揮されるのがカッコイイと思い込み、自画自賛するようになった。

たかが一地域の学校の中で、一喜一憂し、天狗になる事が出来るなんて、人間の小ささを露呈するような物だったんだけどね。小さな世界で生きていたから、そんな事も分からなかったんだな。

今の俺も中学時代から大差無いのかも知れない。まだ上を目指す余地があるのに、現状の上にあぐらをかいている。うかうかしていると足元をすくわれるって、無意識の危機感が夢となって現れたのかも知れない。

幼なじみの女の子に唐突に結婚を申し込まれ、連れてこられた彼女の家で待っていたのは、世界の平和を守る超能力一家の後継者を決める選考会に参加し、他の後継者候補に勝てば結婚を認めると言うメチャクチャな条件だった。

GASマンと呼ばれる謎のプロデューサーが用意した数々のアトラクションに挑戦して行く事になるが、パンツ一丁で花火が飛び出す道を駆け抜けるタイムを競うとか、熱湯風呂に入っていた時間を競うとか、建築途中のスカイツリーからバンジーをさせられたりと、超能力が無い主人公にとっては単にリアクション芸を披露するだけの場と化していた。

そのリアクションが受け、特別点を重ねた主人公は見事最終選考に残る。最終選考は爆発時間の迫る飛行機内で、幼なじみの女の子を奪い合い、共に脱出した物が勝ちというものだった。果たして、主人公は他の後継者候補を出し抜き、彼女を連れて脱出する事が出来るのだろうか？

夢は断片的になり結末は良く解らないが、GASマンがガス不正取引法違反(?)で逮捕されたり、ヒロインが爆発に巻き込まれてアフロになったりと、よりギャグ方面に向かったのは確かだ。

どんな時間でも運行し、なおかついつでも空いていて、滅茶苦茶速い列車があると、友人に案内された。

一般の駅の階段下に置いてある植木鉢を動かし、タイルを剥がすと謎のタラップが。

タラップを下った先、ゴシップな内装の通路で、やはり古めかしい雰囲気の出発ホームへと続いていた。

ホームにはやや丸みを帯び、大きなリベット打ちが目立つ真っ黒いボディの列車が止まっていて、真鍮の配管から蒸気を吹き上げていた。

二両編成のその列車の内装もゴシップで、中央の通路には金の刺繍が施された真っ赤な絨毯が敷き詰められ、一列に4つ並ぶ一人掛けのシートも皮製だ。

俺たちの他の客は一人しか居らず、どこでも好きなシートに座ると、扉が閉まって警笛が鳴り響き、シートに押し付けられるようなものすごい加速をする。

気がつけば、目的地である秋葉原にたどり着いていて、無意識に歩いていると、ラジオ会館の細い通路に出ていた。

あの列車は何だったか、友人は決して答えようとしなかった。

あと、切り立った山脈の岩肌に、鉄板を括り付け、波打った舗装をただけのワインディングロードを走る夢か。

前方を行く車がパンクしたり、フェードしたりと、他の車はトラブル続き。

それでも何とか無事に走破し、綺麗な景色を楽しむ事が出来るって夢。

まず、一つ目は仕事をしている夢で、屋上から伸びている煙突に、上の穴から進入して下から出てこいと言われて、かなり戸惑う夢だ。

タラップはついているものの、どう見ても途中でかなり細くなっているし、俺をもってしても途中ではまる可能性が高い。

おまけに、大抵の場合煙突の下側の点検口は外側から門がかけられていて、中から出る事は出来ないと思われる。

閉じ込められるのが恐ろしいから、下から点検したほうが良いと言っても、受け入れられず、結局、上から進入させられるって夢。

もう一つは久々に会う友達と、海外に遊びに行く約束をしていたが、迎えに行くと友達の父ちゃんと、兄ちゃんがイタリア人になっていて、友達は寝ているからちょっと待っててと言われ、その間、レストランに連れていかれたり、檜狭駐車場への超速車庫入れを披露されたり、ラテンの大家族を見せつけられたり、何だかんだしているうちに、仕事の予定が入っていた事に気がつき、お流れになると言う。

なぜだか知らんが、警察に捕まる夢見た。

あれか、尖閣ビデオをYouTubeにアップすべきだと無責任に思ってて、実際にアップされて問題に発展し、軽々しく考えていた事に罪悪感を覚えているのかもな。

まあ、それはともかく投獄された俺は髪を切られる事に。

中途半端に切るならと、坊主頭を切望したものの、ざんばら頭とかおかつぱ頭にされた。

高校一年の頃、髪の毛が長いつて理由でタンニンに何度も断髪されたトラウマが残っているのかもな。

そして、牢獄から開放されると、運転免許を剥奪され、自分で運転出来なくなった。サーキットだったら、運転して良いだろうと、サーキットに行っても警察に追われて隠れる始末。

髪の毛を伸ばせる、自分で車を運転出来るって事がいかに自由であり、その自由が剥奪される事がどれだけストレスになるか思い知ったね。

PS.そんなロングで車大好きだった俺が、今じゃ坊主頭にして車にも乗らず引き籠っていると言う事は、当時は想像も出来なかった事だろう。

昨日は10時に寝たのだがまだ眠い。

何度も途中で目が覚めたのだが、その中で某国の軍人に追われる夢を見た。

日本のとある温泉街は某国の軍事支配下に置かれ、町には銃を持った軍人と、わずかな観光客や軍人相手に、無理やり写真を撮って売りつける等のアコギな商売をする某国民が往来していた。

俺はそこに住む車仲間の元を訪ねるが、その人は謎の死を遂げ、国家転覆罪の容疑がかけられ、軍人たちが家宅捜索していた。

俺は軍人に拘束されて、その友人についてあれこれ聞かれたりと、半強制的な協力を求められる。

そして、友人の家の中で偶然手にしたサウンドシャキットと言う車用イコライザーのチラシの裏に、遺言と某国の陰謀、そして、手描きで修正が加えられた配線図が書かれている事に気が付き、それをポケットにしまう。

俺はポケットにチラシを隠し持ったまま参考人として連行されそうになるが、軍人が商売人や物乞いに囲まれている隙に逃げだし、現地で待ち合わせ予定だった友達に助けを求める。

とにかく、身を隠せる場所が良いと、向かった場所はなぜか、公共の足湯だった。

友人にそのチラシを見せようと思ったら、警戒中の軍人に発見されて、俺はあわてて足湯の中に飛び込むが、こんな所に隠れても意味ねーと思った瞬間に目が覚めた。

夢とは言え他国に支配されてしまう国は情けなさすぎ。

## 2011.1.21 スタンド使って銀行強盗

---

p.p1 {margin: 0.0px 0.0px 0.0px 0.0px; line-height: 22.0px; font: 13.0px 'Hiragino Kaku Gothic Pro'; color: #333233} p.p2 {margin: 0.0px 0.0px 0.0px 0.0px; line-height: 22.0px; font: 13.0px 'Hiragino Kaku Gothic Pro'; color: #333233; min-height: 20.0px} p.p3 {margin: 0.0px 0.0px 0.0px 0.0px; text-align: right; line-height: 22.0px; font: 13.0px 'Hiragino Kaku Gothic Pro'; color: #333233; min-height: 20.0px} span.s1 {letter-spacing: 0.0px}

俺が素材から物を作り出すハガレンのような能力、破壊再生能力を持つ丈助みたいな奴と、自分の周りをステルスにする能力を持つ中学生の女の子と、三人のスタンド能力を使い銀行強盗を企てる夢を見た。

銀行内の内部事情は解っているので、実行に移す前に自分たちの能力を上手く使えるように練習を積み重ねる。

銀行の休館日を狙って実行に移し、ステルスで移動して破壊能力で壁を壊して金庫に侵入、偽札を作り出して置き換えて壁を元に戻して撤収した。

寝ながらも俺の理性が何でもコピー出来るんだったら、始めから侵入する必要無かったよねって突っ込みを入れたが、それでも夢は続く。

俺と丈助（仮）は金を現金で持っていて使わずそれまで通りの生活を続けているが、女子中学生は丈助名義のクレジットカード（30万の制限付き）で買い物を繰り返していた。

女子中学生は親がいない為、親戚の家に厄介になっているのだが、怪しまれないように買った服を、一度着ただけでゴミ箱に捨てていたのだが、それを叔母のねーちゃん（ハーレー乗り）に見つかってしまう。

「私たちの間に言葉は要らない。喋りたくないなら拳で語り合おうぜ」

肉体言語という名の鉄拳制裁に屈してしまいそうになった時、丈助（仮）が助けに入る。

「俺達つきあってるんすけど、俺って意外と金持ちなんで一、俺名義のクレジットカードカ

ード渡して使わしてやってるんすよー。叔母さんに俺達の間係を知られたくないって言う、姪御さんの気持ちわかってやって下さいよー」

「あら、意外と良い男じゃないの！！ でも、つき合ってた挨拶にも来ないなんて、感心しないわねえ。でも、私も鬼じゃないわ。今後、私の執事・・・と言う名の奴隷になってくれれば、付き合いを許してあげましょう！！」

ゴキッ！！

拳の鳴る音に戦慄を覚える丈助。

銀行強盗をしたばかりに、特に好きでもない女子中学生の恋人にさせられてしまったあげく、一生を奴隷として過ごすというツケを払わされてしまった丈助であった。

一方で俺は普段とあまり変わらない生活を送りながらも、罪悪感とストレスで衰弱して行ったという（汗